

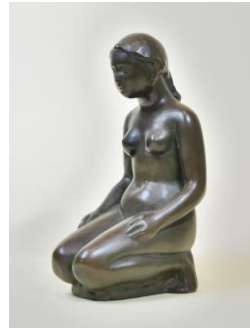
(投稿者)



平園賢一  
 宇都宮義文  
 木村悦雄・正子  
 中柴雅彦  
 畝 一雄  
 福井 豊  
 堀 良慶  
 上村真澄  
 和田孝明・幸子  
 永津照見  
 野原 宏  
 水口英男  
 田村和司  
 太田貞雄  
 中村 徹  
 小山美枝  
 鈴木忠男



(順不同・敬称略)



あーと・わの会 ( 通称「わの会」 )

# 61回放談会(ネット上)

日時 2021年 4月吉日

インターネット投稿

参加者 (計19名)



## 61回放談会－ネット誌上－(順不同)

出品者 平園賢一さん



作品名	古丹波 自然釉壺
材料・技法	土 陶器
制作年	室町時代末期
サイズ	45cmX35cm



古丹波を世に広めた壺中庵の扱ったものは一味違う。モスグリーンが目沁みるひんやりした森を歩いているような気分させる優品である。壺中庵2代目中西通氏が箱書きしている・・・「本器ハ室町末期ニシテ自然釉ノ流レ器形トモニ見応えノアルモノデアル」。30年以上前になるが、大磯に古美術店があり名物店主がいた。何となく仲良くなり名品から贗物のからくりまでいろいろ教えてもらった。そんなある日、国際線のパイロットで六古窯のコレクターが来店しており、こんな話をしてくれた。「平園さん、壺は宇宙です。外の景色も魅力的だが、壺の中をのぞいてごらん。底知れぬ暗闇はブラックホール、宇宙空間そのものなのです。空を飛んでいると壺という器形の本当の意味が肌身で感じられます」と。なるほど、外が地球という自然の景色、中の暗闇が宇宙というシンプルで深い壺の鑑賞のコツがわかった瞬間であった。

私は壺コレクターの壺にはハマらなかったが、絵画彫刻の壺にハマったのであるが・・・お後がよろしいようで。

出品者 宇都宮義文さん



作家名 茶道の千家十職の大西家の京茶釜同類の酒器  
と判断する以外不詳  
作品名 茶懐石料理用 酒器 銘 淡海。図柄の近江八景に因み私が命名  
材料・技法 鑄鉄  
制作年 不詳  
サイズ 高15 差し渡し19.5cm 直径12.5重さ 790g



近江八景の図柄が当作品の六角六面にある。茶道用品としてわやや文様過剰かとおもわれるが門外漢の無用の差しで口。内二面にわ二景がある筈だから八景となる。

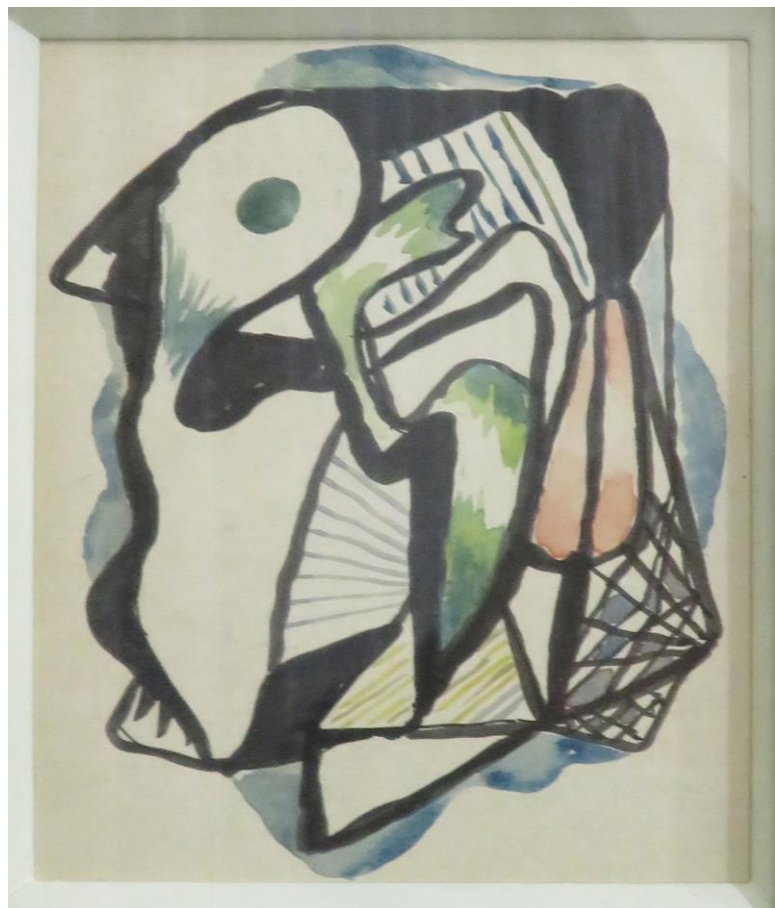
近江八景とわ、関白近衛政家が中国のシヨウシヨウに因み琵琶湖の南の地方の景勝地を 勢多の夕照 石山の秋月 粟津の晴嵐 唐崎の夜雨 比良の暮雪 堅田の落雁 矢橋の帰帆 三井の晩鐘 と定めたとのこと。

尚、大西家作品と断定できたのわ知人の茶道家の助言に従った。質素儉約の祖父の代で壊れた蓋、持ち手、を厚手板金で修理し用に供して来たと言うこと以外作者、製作年を推定する手掛かりの品がない。ただ当作品の湖岸の長浜城の図柄が如何にも戦国を想わせるものから徳川期以降やや柔らかな景色に変化したのでわと想わせる近年の作品例の写真が他にある。秀吉時代の作品か徳川時代の作品かの判別の手掛かりになるのでわないかとみるのもまた一興。

時の権力者えの保身上のソントクの結果家風伝来の図柄もソロリと変化させると見るのも昨今の政治的風潮に照らしてシモジモわまたタノシカラズヤである。

ま、茶道用具の話だから生臭い話でわなく、この酒爛器の景色をゆっくり楽しんで頂き唐の禪宗和尚のセリフの 喫茶去 の心境に浸ってください。

出品者 木村悦雄・正子さん



「顔」

作家名	今西中通
作品名	「顔」
材料・技法	紙に水彩
制作年	不明（1940年頃？）
サイズ	13×11cm



「自画像」（参考作品）現代画廊の「今西中通展」で購入  
現在は「高知県立美術館」に寄贈

（どこが「顔」やねん?!）

洲之内徹氏縁の「現代画廊」の活動が東京の銀座で盛りだった頃は、我々のような団塊の世代のサラリーマンコレクターにとっても黄金時代の一時期であったように思う。芸術新潮に毎月掲載された「気まぐれ美術館」を頭に描きながら、画廊の現場できまって夕方から現れる洲之内氏の生の言葉を遠巻きに聞いていたことが懐かしい。

時が経過した今、「洲之内銘柄」と称して何人かの作家の名が、その時代を生き残った証として語り継がれ、時折美術館に作品が展示され美術市場に名が載る。

「今西中通展」の展示風景が、当時の展覧会の中で一番の印象に残る思い出。あの独特の建物の3階で今でも目にすることが多い水彩、デッサン類を見た後、細くて急な階段を昇った5、6階の狭い会場に詰めこまれ展示されていたフォーブ、キューブ調の油彩画（今は高知県立美術館を中心に各地の美術館に収蔵されている）に出会った驚きが、その後一皮むけた絵の見方につながった。「どこが顔やねん?!」、小さな水彩画だが、あの日会場で出会った緊張感漂うフォーブ、キューブ調の油彩画の一群に通じる大切な作品である。

作家略歴 今西中通（いまにし・ちゅうつう/1908～1947年）高知県生れ。1927年上京。川端画学校、「一九三〇年協会」洋画研究所、独立美術研究所に所属。前田寛治、里見勝蔵に学ぶ。「一九三〇年協会展」、独立美術協会展、独立24人展等に出品。35独立展でD氏奨励賞。福岡で絵画研究所を設立する。47年独立美術協会会員。福岡県で没、38歳。（出典 わ眼）洋画家

出品者 中柴雅彦さん

作家名	ガタロ
作品名	「無題(モップ)」
材料・技法	画用紙・ 鉛筆・木炭・水彩
制作年	不詳
サイズ	38×30cm



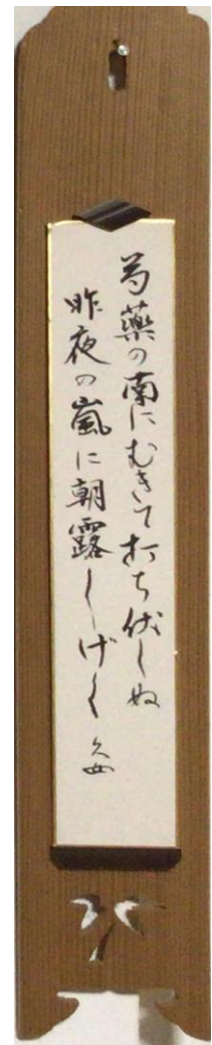
「何故このようなモチーフを描くのか」という作品に時々出会う。美しい風景や花、建物等ではなく例えば「石ころ」のようなもの或いは、「屋根瓦」だけを描いたもの等々。この作品は、まさにその究極ではないだろうか。清掃用の「モップ」をモチーフとしている。

ガタロ氏は、偶々このモチーフを描いたのではない。『掃除用具』のみを描くようだ。作品をよく見ていると丹念に正確に描き込まれている。画家のモチーフへの「愛着」のようなものが非常に感じ取れる。否「人格」のようなものさえ感じ取れる。そして何より作品として『美しい』のである。それはある種技量を超越したものである。世の中で「軽く」扱われるもの、敢えて言えば、「蔑んで」いるもの、、、にあたたかな眼差しを当てる。そのことは、同時に「人間」に対しても同様の眼差しを作品から感じるのである。弱者やマイノリティとして「体感」しているからだろうか。否、『尊厳』を持っている。世の中で「役に立っている」という誇り！この心持ちは生半可に体得出来るものではない。人間、当然私を含めて「無いものねだり」「妬み」を大なり、小なり内包して生きている。画家のモチーフへの「寄り添い」は、即ち画家の「哲学」を暗示し、懐の大きさは、「生き様」へと昇華した画家自身の『自画像』作品であり、川端康成の言葉を借りれば『豊烈哀号』の心情をもって存在感を感じさせる。画家は忌避するだろうが、作品それ自体の評価が「マイナー」ではなく「メジャー」へと正当に認知されることを、私個人は希求するものである。

---

作家略歴 **ガタロ** 1949年広島市生まれ。広島市在住清掃員画家。四国五郎に師事。NHK ハートネットTV『捨てられしものを描き続けて～清掃員画家・ガタロの30年～』出演。2010年アウトサイダー・アートフェア(ニューヨーク)出品

出品者 畝 一雄さん

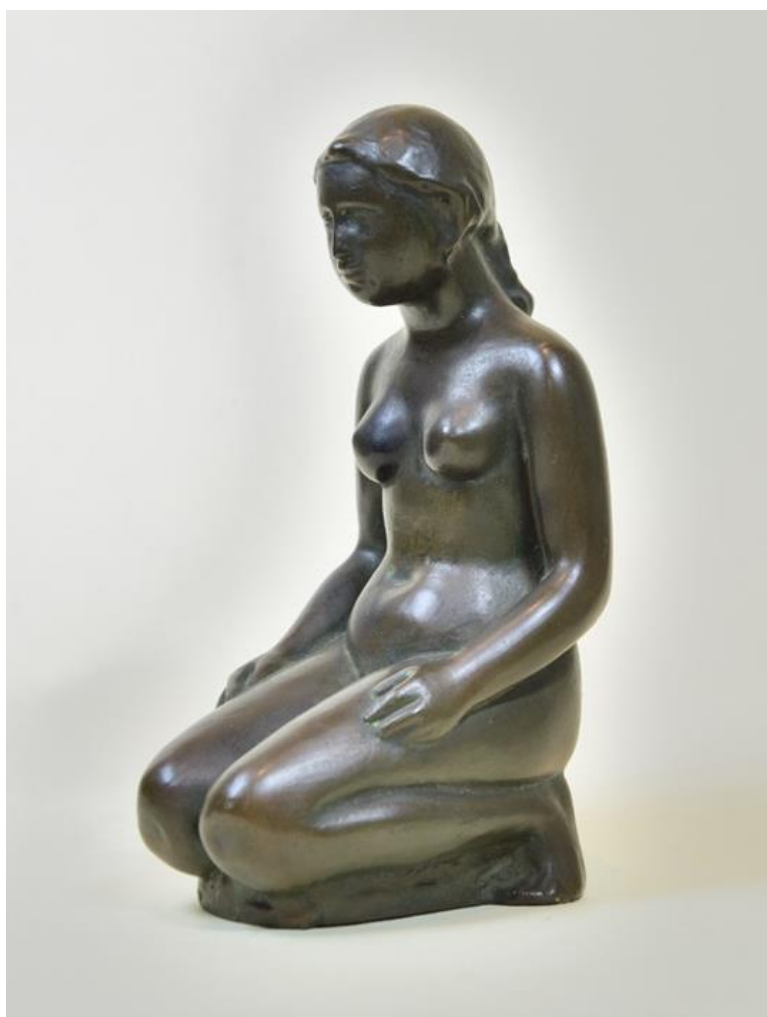


作家名	不詳
作品名	不詳
材料・技法	パステル
制作年	不明
サイズ	色紙サイズ

母の短歌「芍薬の南にむきて打ち伏しぬ昨夜の嵐に朝露しげく」  
に結び付く絵はないかと思ったのですが、なかなか無いので  
梅野絵画館友の会のオークションのセリで求めたものです。

出品者 福井 豊さん

作家名 アリステイド・マイヨール  
(仏・1861～1944) Aristide Maillol  
作品名「座像」(山浦健夫著の藤川勇造  
ノートは「小品少女」)  
材料・技法 鑄造・ブロンズ  
制作年 1900年頃  
サイズ・重量 H17.5×W8.0×D10.0cm・846g



1930年秋、東京府美術館で開催の第17回二科美術展彫刻の部に出品された作品。当時二科彫刻で唯一人の会員であった藤川勇造(1883～1935)が自作と別に代理出品したらしい。他にピカソの塑像? 「道化役者」も出品し共に目録掲載され写真絵葉書も作製された。仏留学中ロダンの助手を務めた藤川は1919年、二科に会員として迎えられ1929年、番衆技塾を創設し後進の指導に当たっていた。髪を後ろに結び控えめに正座する少女のポーズは東洋的で日本女性がモチーフだったのかもしれない。無銘初期作品だが鑄抜けの良い小像である。

作家1861年仏バニユルス・シュル・メール生。1881年パリに出て1885年国立美術学校に入学するが中退、のちにゴーギャンの影響でタピスリー制作。1895年彫刻開始。1900年視力衰え彫刻に専念。ドニを始めとするナビ派グループと親交。1902年初個展の「レダ」がロダンに賞賛される。1905年サロンドートンヌ出品「地中海」が好評、ロダンの紹介でパトロンを得る。1910年木版画制作開始。1933年バーゼル美術館大回顧展。1937年パリ万博プティ・パレ展覧会3室特設。晩年は絵画制作も再開。1944年自動車事故原因で没、享年82歳。

出品者 堀 良慶 さん



作家名	庄漫
作品名	「老人と少女」
材料・技法	紙・メゾチント制
作年	2008年
サイズ	49×35.5cm

2020年11月にU氏コレクションが寄贈されました。作品の中から、私も好きな作家・庄漫の「老人と少女」を選んで見ました、御覧下さい。作家は笹木繁男さんから紹介いただいた作家です。

老人は容貌、帽子から中央アジア系のイスラム教徒かも知れません。農業関係者で果物を売っているように見えます。作者・庄漫は上海出身者です。「楼蘭少女」、「遥」（遊牧人のパオ）、そして「老人と少女」を描いています。シルクロードを旅したのかも知れません。私はこの「老人と少女」の絵を見てフッ！と何故か！義父を思い出しています。風貌が似ています。寡黙な哲学者の様に見えます。見つめる内、私の好きな言葉 「君看双眼色、不語似無愁」を自然に思い出しました。

君 看よ 双眼の色

語らざれば 憂い無きに似たり

「あなた、あの人の双の眸をよくごらん下さい。あの人は自分のことについて語ろうとはしない。また他の人もあなたのことに語ることをしないから、あの人のして来たことについて何も分からない。あの人はまるでこの世の憂いなんかなにも知らない人のように見える。しかし、あの人の眸の奥の方をよくのぞいてごらん下さい。人の世の辛酸をなめつくした深い影が、あの人の双の眸の奥底に沈んでいるのですよ」。眸は老人の横に座った少女が雄弁に語っている様に私には見えます。

芥川竜之介がこの古語を好んだということは、彼の魂の一番奥底に、誰にも知られないが、ほんとうにそれを見抜く眼を持った人であったら、必ず見抜くであろうという陰影があったということでしょう。

この言葉は、竜之介よりもはるか以前に大燈国師の句「千峯雨霽露光冷（せんぼうあめはれて、ろこうすさまじ）」に対し、白隠禅師が偈をつけたのが「君看双眼色、不語似無愁」で、白隠の著語です。良寛上人もこの古語を好みであって書にもしたためられています。

何時も寡黙で、凜とした佇まいの、ご自分のことは語らない優しいUさんにいつの間にか、私はこの言葉に重ねて感じていたのかも知れません。寄贈過程でお家にお邪魔した時、大正期から続く老舗企業の経営者であったことを知りました。急な寄贈は体調のご事情もあるでしょう、愛されてきた作品の寄贈は誰もが出来るものではありません。

---

作家略歴 庄漫（しょう・まん/1972年～）上海生れ。1995年上海第二医科大学口腔医学部卒。2000年来日。06年文化女子大学造形学部生活造形学科卒。鹿取武司の指導、メゾチントに出会う。国際版画展に出品。07年日本版画協会展。11年NHK-BS1「アジアクロスロード」で紹介される。日本版画協会準会員。版画家



出品者 上村真澄さん

作家名 瑛九  
作品名 「春のワルツ」  
材料・技法 リトグラフ  
制作年 1957年  
サイズ(マット内サイズ)  
43.2×27.3cm



瑛九生誕110年を迎える今年、改めて瑛九さんへ感謝の意を捧げます。「リト病にかかった」とリトグラフに夢中であった頃、脂が乗っていた頃の作品です。時を超えて今、私達は作品を通じ幸福感の恩恵を頂く。なんて素敵な。『手と手を繋ぐことががはばかれる昨今、私達はお互いに触れることもなくワルツを踊るの。素敵なワルツをswingするような今回の作品は幸福感に満ち満ちた作品のよう。

黙って踊るのよ。マスクをなさってね。音楽はチャイコフスキーの「花のワルツ」をリクエストするの。会食はございません。おしゃべりは翌日Zoomでよろしく願い申し上げます。』やがて嵐が過ぎ去り、いつでも手を繋げるようになったら…あの慈しんだ距離感を愛おしく思えたりして。

Heard melodies are sweet, but those unheard  
Are sweeter; therefore, ye soft pipes, play on;  
聞ゆる楽の調は美しい、さあれ 聞こえぬものこそ  
更に優りて美しい。されば ゆかしき笛よ、やまず奏でよ (キーツ詩集より)

作家略歴 瑛九 (えい・きゅう/1911~1960年) 宮崎市生れ。日本美術学校中退。洋画家版画家、写真家。前衛的、抽象的な作品で知られる。フォトデッサンを制作。1937年自由美術家協会創立会員。51年デモクラート美術家協会を結成。創造美育協会に参加。東京で没、48歳。(出典 わ眼)洋画家、版画家、写真家

出品者 和田孝明・幸子さん



作家名	オノサト・トシノブ
作品名	「長崎風景」
材料・技法	キャンバス・油彩
制作年	1934年頃
サイズ	72.3×39.5cm

本作品は、川越のK画廊が親交のある栃木県真岡市、久保貞次郎の遺族から購入したものである。

この風景は、漁村を見おろす形で描かれている。近くには灰色の民家が立ち並ぶ。道の先にある棒につるされている三角形の物は、漁網であろうか。遠くの海には、漁船や島などが覧られる。また、どんよりした雲の切れ目からのぞく茜色の夕日が、この絵に強いインパクトを与えている。全体を灰色の主調色でまとめ、この時代における暮らしの様子が伝わってくるような作品である。

なお、裏面にK画廊のコメントが貼られている。

オノサト・トシノブ 長崎風景 1934年頃 油彩・キャンバス 旧久保貞次郎コレクション 1935～1936年にかけて、14回開催された黒色洋画展の出品作品と思われる。

---

作家略歴 オノサト・トシノブ (おのさと・としのぶ/1912～1986年) 長野県飯田市生れ。現代美術作家。1931年津田青楓画塾に学ぶ。37年自由美術家協会結成、会友として参加。63年日本国際美術展で最優秀賞。64, 66年ベニス・ビエンナーレに日本代表として出品。戦前戦後を通じ前衛美術の道歩んだ。桐生市で没、74歳。(出典 わ眼) 版画家、洋画家

出品者 永津照見さん



作家名	寺島紫明
作品名	「女」
材料・技法	紙 木炭、墨、水彩、
制作年	1956年
サイズ	60×39cm

大阪のある骨董屋でこの作品に出会った。  
サインや印は無いが、作品から感じられる上品な雰囲気には寺島紫明と直ぐにわかった。

真摯に対象のイメージと向き合って追求する姿勢が感じられる本物の仕事である。  
重ねられた線によって表現された  
女性は動勢を豊かに感じさせる。  
大掴みに捉えられた形態は、リズムカルで心地よい。

店員は「サインは無いですが、間違いはないと思います…。」  
額裏のシールには展覧会出品の記録があり間違いはない。  
価格の心配をしたが、せっかくの出会い。奮発して購入しようと店員に尋ねたところ、  
信じられない程の安価！  
それでも三浦徹先生の教え通り、値引き交渉。申し訳ない程の値段で購入できた思い  
出の作品である。

---

作家略歴 **寺島紫明**（てらじま・しめい/1892～1975年）1892 兵庫県明石市に生まれる。  
1927年第8回帝展に〈夕なぎ〉が初入選。1958年日展評議員に就任。  
1961年第4回新日展に〈舞妓〉を出品し文部大臣賞を受賞。  
1970年改組第1回日展出品の〈舞妓〉が日本芸術院恩賜賞を受賞。

出品者 野原 宏さん



私は詩人の絵が大好きです。  
瀧口の水彩で描かれた裸婦像も梅野隆氏のコレクションから分譲をうけています。  
ある時、目利きのコレクターの岩本さんがデカルコマニーの優品を所蔵していることを耳にしました。  
この作品を拝見してから数年がたちやっ手放していただいた思い出の作品です。  
数ある瀧口のデカルコマニーの作品の中でも印象に残る作品の一点だと思っています

作家名	瀧口修造
作品名	不詳
材料・技法	デカルコマニー
制作年	1970年
サイズ	13.5×10cm

作家略歴 瀧口修造（たきぐち・しゅうぞう/1903～1979年）富山県生れ。1931年慶応義塾大学英文科卒。美術評論家。シュルレアリスムの理論的支柱。47年日本アヴァンギャルド美術家クラブ結成。50年より美術評論を執筆。線描デッサンやデカルコマニーの絵画作品制作。58年ヴェネツィア・ビエンナーレ展日本代表渡欧。59～62年美術評論家連盟会長。「近代芸術」「今日の美術と明日の美術」、詩集「瀧口修造の詩的実験1927～1937」、訳書ブルトン「超現実主義と絵画」。全集「コレクション・瀧口修造」(全13巻・別巻2 みすず書房)。1979年没、75歳。評論家、詩人、洋画家

出品者 水口英男さん



作家名	高木 俱
作品名	小名木川
材料・技法	紙に不透明水彩(ガッシュ)
制作年	1990年
サイズ	32×44cm

高木俱は無名の作家です。高潔で一点一点時間をかけて作るのので、慎ましい生活をされていた。この作品は、右側に堤と左に薄か葦が描き風景としてはシンプルな構成。色調もグレー系でモヤっとした所と、柵など細かい描写でそれでいてバランスの取れた作品で、どこにでもありそうな風景を象徴的に描かれている。名木川は江東区北部を流れる運河で徳川家康の命によって作られたとある。今は都会の喧騒の中に佇んでいるのですが、この作品は時間が止まったような静かな世界です。

---

作家略歴 高木 俱 (たかぎ・とも/1924～2016年) 東京生まれ。多摩造形芸術専門学校中退。1949年より沼津に住む。58年より個展、グループ展多数。59年資生堂ギャラリーで個展。62年～75年アルミレリーフ及び壁画制作。81年アジア現代作家展招待(バーレーン王国)。89年裾野アートハウスで個展。2016年没、92歳。(水口)洋画家

出品者 田村和司さん



作家名	木村五郎
作品名	兎
材料・技法	木彫
制作年	不明
サイズ	高さ10X幅22.5X奥行き9(cm)

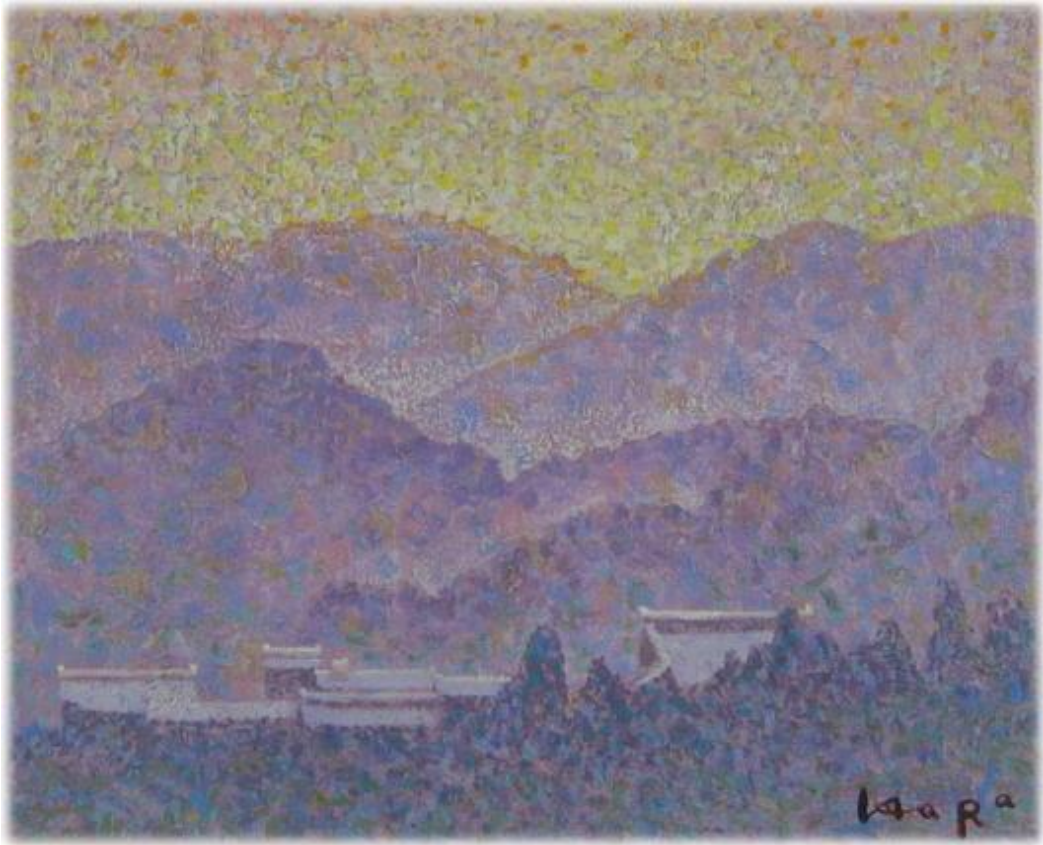
所有する木村五郎作品3点の内、最初に購入した作品である。  
「兎」の眼に作家の心根を見るからか、私がこの作品をそのように見るからか、それは分からない。  
いつか木村五郎の風俗人形が欲しいがなかなか市場にでてこない。  
風俗人形が手に入ったら3点の作品（兎、豚、牛）と共に並べ木村五郎に語り掛けたいと思う。

純朴で優しい人ですね---と。

---

作家略歴 木村五郎(きむら ごろう)1899~1935 享年36  
東京生まれ。1917年山本瑞雲の弟子となる。  
24年日本美術院賞、院友 27年同人

出品者 太田貞雄 さん



作家名	原 秀樹
作品名	山の朝
材料・技法	キャンバス、油彩
制作年	不明
サイズ	27.3×22cm F3号

静かな山の中、寺の屋根だけを青緑色の山に囲まれて描いている。  
この絵を見ているだけで自分が瞑想しているような感じがする。

---

作家略歴 原 秀樹(1943年～) 1943年 東京都生れ

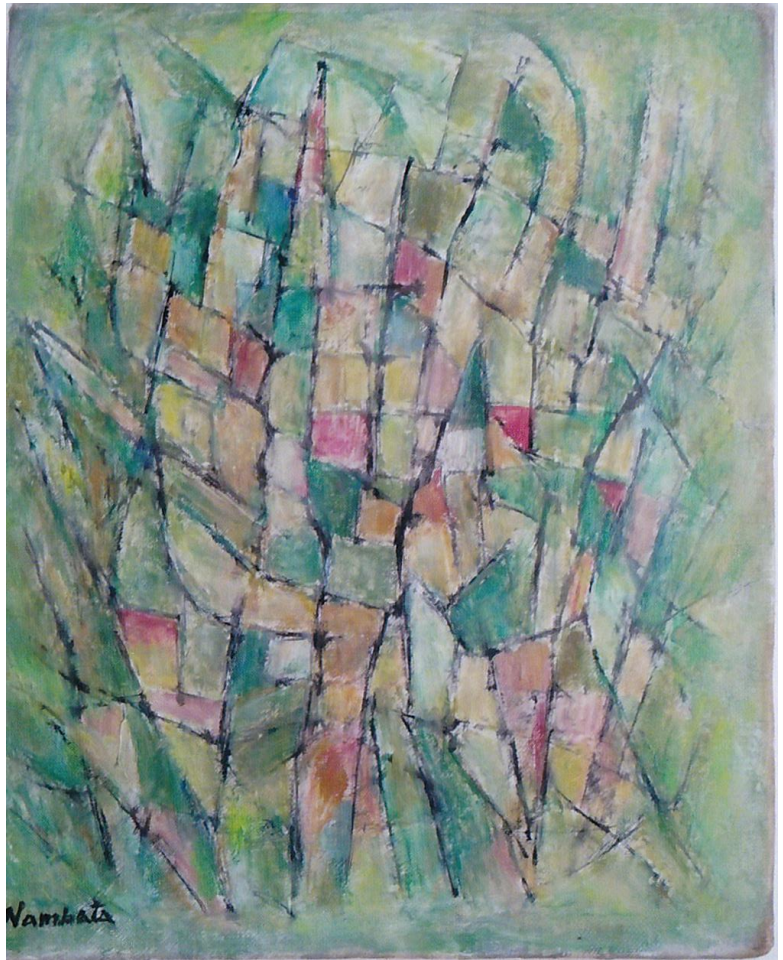
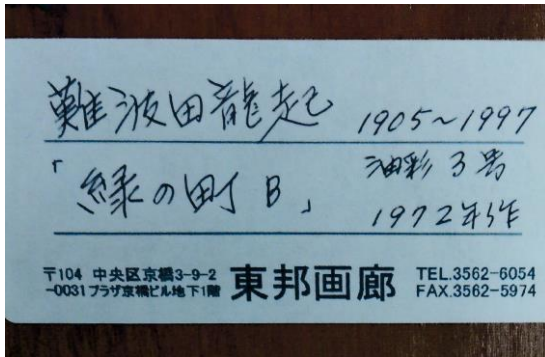
1965年 東京芸術大学卒業

1973年 イタリア・ルッカ国際具象派展トスカナ賞 現代の幻想絵画展招待出品(朝日新聞社主催)

1978年 『週刊読売』表紙・人物画シリーズに作品掲載(～'79)1984年 昭和会賞展招待出品('85)

現在無所属

出品者 中村徹さん



作家名	難波田龍起
作品名	緑の街B
材料・技法	キャンバス・油彩
制作年	1972年
サイズ	27.3×22cm F3号

難波田龍起著「抽象」（緑地社 1979年発行新版）を読んでいた私は、いつの日か、難波田作品を1点は持ちたい、と願っていた。

2012年初め、いまは亡き東邦画廊中岡さんから、難波田作品を買わないか、との悪の誘いの電話があった。高い価格に逡巡しながらも、分割払いで、本作品を求めた。

「身体と精神が分離した画家」とも言われた画家だが、高村光太郎が記しているように、「難波田龍起君の芸術の中核はその内面性にあるように思はれる。」（前記「抽象」より）

松任谷由美作曲のアルバム「緑の街に舞い降りて」を聴きながら、本作を眺めている。

---

作家略歴 波田龍起（なんばた・たつおき/1905～1997年）北海道生れ。

1926年早稲田大学政経学部入学、中退。太平洋画会研究所に通う。36年アヴァンギャルド芸術家クラブ結成に参加。38年自由美術家協会会員。戦後は抽象表現的作風。74年フジテレビギャラリー回顧展。87年東京国立近代美術館回顧展。96年文化功労者。97年没、92歳。



出品者 小山美枝さん



作家名	保手浜 孝
作品名	とぶ
材料・技法	紙・木版
制作年	不詳
サイズ	9.5×12cm

15年ほど前の話である。姪が小学校に入学した。それから毎日詩を暗唱していた。いろいろな詩があった。その中にくどうなおことのはらみんな著「のはらうた」があった。くどうなおことという詩人が野原の動物・植物・自然のみんなが語った詩を文字に起こしている設定だ。その「のはらうた」を絵に描きたいという人が現れた。「ほてさん」こと、保手浜孝さんである。素敵な版画「のはらうた」ができた。のはらのみんなは「ほてさん」に描いてもらうのを楽しみにしている。

という設定で、この作品と「版画のはらうた」を見る。

優しい。のはらのみんなの詩が版画で優しさに溢れている。

この「とぶ」という作品は「版画のはらうた」用の作品かは分からない。でも「ほてさん」の世界は、優しさに満ちている。

山口県の版画家さんだそうだ。

教えてくれて、送ってくれた中柴氏に感謝である。

---

作家略歴 保手浜 孝(ほてはま たかし) 1951年兵庫県生まれ。奈良教育大学卒業後、伊丹市の小中学校で図工・美術教師を勤める。82年「絵が絵が描きたくて」山口県に転居。以来油絵と版画を制作。詩集をもとに87年から作り続けている「のはらうたカレンダー」を毎年楽しみにしているファンも多い。

出品者 鈴木忠男さん

作家名 小原古邨  
作品名 「有明月に木菟」材  
料・技法 和紙・多色木版画  
制作年 昭和初期  
イメージサイズ 34.5×19cm  
(37×21.3cm)

今年3月に崇文荘（神保町の洋書店）目録にあった小原の木版画の摺り具合と状態を確認してから、十万円以下で購入した。すぐに新刊書店に行き『小原古邨木版画集』（阿部出版、2018年刊行）を立ち読みしたところ、この作品は初摺ではなく、すぐの後摺らしい（共に明治）、しかし古い状態ではないし、左下に「版權所有 西宮與作」とあり気になった。今回放談会に出品するにあたり、PCからの情報を読んだら、分かってきた。以下情報をまとめてみた。

木版画といっても初めて訊く手法である一絹本の本画（小原）を写真に撮り現像後、乳剤面をガラス面から剥がし、それを版木に貼って彫った、以後は通常のやり方となる。



明治から大正時代の版元は滑稽堂（秋山武右衛門、芳年の「月百姿」など）、大黒屋（松木平吉、清親の光線画など）で大短冊。昭和元年からは「祥邨」号で渡邊版、昭和初期には「豊邨」号で川口商会・酒井好古堂合同版で共に大判を出している。そして両国にあった大黒屋は関東大震災に遭い、松木が昭和6年に亡くなり、版木が西宮与作（にしのみやよさく）に譲渡された、この人は「日本昔噺縮緬本」を出版した長谷川武次郎の次男である。版權所有にあたっては小原本人との交渉があったのかは不詳、また昭和初期からは3つの版元から売られていたことになるが、この西宮版はいつ頃まで摺って売ってたのか不詳、戦前まで、いや戦後も外人土産として売られていた可能性がある。制作年を昭和初期にしたが、もっと下るかも知れない。小原の評伝でも書かれないと謎や不詳、不明なことが残っている。

因みに太田記念美術館の出品リストを見ると松木版が一番多い、渡邊版、秋山版と続き、合同版（4点）、西宮版（2点）となっていた。

最後に会誌に連載している某日月誌（ほうじつげっし）わの会編に2年前に書いた一文を付け足します。（次頁へ）

(前頁より)

○2月某日：「小原古邨」太田記念美へ、図録は出ないと思っていたら公式図録として『小原古邨 花咲き鳥歌う紙上の楽園』（太田記念美監修、日野原健司著）が2月に刊行された。他にも去年刊行された『木版画集』（12月）『小宇宙（マイクロコスモス）』（10月、茅ヶ崎展に対して）がある。浮世絵版画の場合は版下絵を画家が描いて、裏返し、版木に貼り、彫るので基本的には原画はない。しかし小原のは絹本に描いた原画が残っているようだ、それを元に版下絵を描いたのか（誰が描いたのか）、その原画の余白が版画にそのまま反映されている。版元が渡邊になってからは四隅に余白のある新版画になっている。外人向けのお土産用なので、摺り数もかなり多いようだ。先の本を読めば以上の件は分かるだろう。にしても見た感じに先入観があり、木版画にみえないのだ、素晴らしい摺り技術（復元力）のせいだろうと思う。照明の当て方により照りが見えたりする。

---

作家略歴 小原古邨(おはら・こそん/1877年(明治10年)生～1945年(昭和20年)没。)  
石川県金沢市生まれ、日本画家鈴木華邨に師事。日本画家、欧米向け輸出用の花鳥木版画の下絵師、他に「祥邨」「豊邨」の画号を持つ。

---

編集後記： コロナ禍による自粛から丸一年。  
ここは「あーと・わの会誌上美術館」です。  
会員のコレクション作品をご覧ください。作品へ込めた熱き想いをお届けします。  
アートで癒しを、活力を、勇気を、希望を！

発行 : あーと・わの会  
発行日 : 2021年4月吉日  
編集 : 実行委員 あーと・わの会 放談会チーム  
写真、編集、デザイン 井澤尚子  
連絡先 : 事務局(堀 良慶) 〒277-0871 柏市若柴1-358  
TEL 04-7134-8293 ryokeihori@yahoo.co.jp